

やさしい 日本語 の世界

外国人にやさしい言葉
は日本人にもやさしい

外国人に分かりやすく情報を伝えるための言葉「やさしい日本語」。
災害時の情報提供手段として、定住初期の日本語として、そして何よりも
平時の暮らしを支える地域社会の共通語として、その役割が増えています。
日本語教師はこれにどう関わるか。一橋大学・庵功雄教授を訪ねました。

取材文／仲藤聖美 イラスト／ワタナベモトム



始まりは阪神・淡路大震災
外国人にも伝わる情報提供を

専門用語や敬語、難しい言い回しを避けるなど、日本語を母語としない人にも理解しやすく、伝わりやすいように工夫された「やさしい日本語」。この言葉が注目を集めるようになったのは、1995年に起こった阪神・淡路大震災がきっかけだ。

当時、被災者の中には留学生を中心とした外国人も多かったが、水・食料配布場所などのお知らせ表示は日本語と英語のみのことがほとんど。結果として、そのどちらも理解できない人たちが、必要な情報から取り残されるという事態になった。その反省から、「やさしい日本語」での情報提供の必要性が言われるようになったのである。

しかし、「やさしい日本語」での情報提供は、災害時だけに必要なものではない。一橋大学国際教育交流センターの庵功雄教授は10年ほど前から、平時における「やさしい日本語」での外国人への情報提供についての研究を、他の研

究者らと共同で続けてきた。

「ある講演会で、『外国にルーツを持つ子どもたちが、十分な日本語を身に付ける機会がないためにアウトローの世界に入ってしまうことがある』という話を聞いたことが、平時における『やさしい日本語』に関心を抱ききっかけの一つになりました。多くの子どもたちは、自分で望んで日本に来たわけでもないのに、生活の基盤をつくる『教育』の場から排除されてしまるのはあまりに理不尽だと考えたのです」

庵教授が、平時における「やさしい日本語」の側面の一つとして挙げるのが、そうした子どもたちを対象とした「バイパスとしての〈やさしい日本語〉」だ。外国にルーツを持つ子どもたちが日本社会で自立して生きていけるようになるためには、同世代の日本の子どもたちと同等の日本語力を身に付けられるよう、十分な支援を行わなくてはならない。その際の「バイパス」としての役割を果たすのが「やさしい日本語」ということになる。

「一方、同じ在住外国人でも、



大人の場合は必ずしも『日本人と完全に同等の日本語力』を身に付ける必要はないかもしれません。ただ、その人が日本社会の中に自分の『居場所』があると感じ、精神的に安定した状態で暮らしていくためには、やはり周囲の人たちと言葉で意思疎通ができるようになる必要があります。そこで重要になるのが、『やさしい日本語』が持つもう一つの側面、『居場所づくりのための〈やさしい日本語〉』なのです。

地域社会の共通語として 日本語を機能させるために

「居場所づくりのための〈やさしい日本語〉」には、日本に来たばかりの外国人への初期教育などいくつかの機能があるが、中でも重要なのが「地域社会の共通言語」としての〈やさしい日本語〉という機能だ。

地域社会で外国人が暮らしていくためには、日本人との間に何らかの「共通言語」が必要になる。しばしばイメージされるのは英語だが、日本で暮らす外国人が英語話者ばかりではないことを考えれ

ば、共通言語は「日本語」以外にはあり得ないということになるだろう。

「そのときに、もちろん外国人の側にも最低限の日本語を学んでもらう必要がありますし、それに対する公的支援はあるべきですが、日本人の側もそのまま普段どおりの『日本語』を話せばいいというのではない。相手に合わせてレベルを調整した『やさしい日本語』を話さなくては、共通言語としては機能しません。『日本人と同じように日本語を話せる人しか受け入れない』というのでは、多文化共生社会とはとても言えないはずです」

では、その場合に日本人が話すべき「やさしい日本語」とはどんなものなのか。決まった型などはあるのだろうか？

庵教授らの研究グループでは、最低限自分の言いたいことを伝えるために必要な日本語の文法項目を整理し、それに対応する形で地方自治体などの公的機関が出す公式文書を書き換えるなどの取り組みも進めてきた。

しかし、これまで研究を重ねる

外国人のための「平時」における情報提供の手段

〈やさしい日本語〉

居場所づくりのための〈やさしい日本語〉
～定住外国人に向けた暮らしのサポート～

滞在初期の日本語教育（公的保障）として
外国人と日本人の共通言語として
地域型日本語教育の初級として

バイパスとしての〈やさしい日本語〉
～外国にルーツを持つ子どもへのサポート～

日本語母語話者との日本語能力の差を解消
日本語母語話者と対等に競える力の獲得

多文化共生社会の共通言語

中で、そうした「形式」の部分は、「やさしい日本語」を考える上では副次的なものにすぎないと感じるようになったという。

「一番重要なのは技術的なことではなく、自分の話す／書くことがきちんと相手に伝わっているかを常に確認し、相手の言うことも理解しようとする姿勢です。相手を一人の人間として見て、関心を持っていれば当たり前のことだし、そうなれば話す言葉も自然と『やさしく』なっていく。」

しかし、今の日本社会において、外国人と接する人が皆そのようにできているかといえば、残念ながらそうは思えません。その意味では、外国人に対する日本語教育以上に、日本人に対する教育が必要なのかもしれないと考えています」

多くの人が、「相手に合わせて、伝わるように」話す、書くという姿勢を常に持つことができるようになれば、そしてそれが当たり前になるになれば、「やさしい日本語」という言葉自体がいつか不要なものになるかもしれない。「それこそが、『やさしい日本語』にとっては一番名譽なことと言える

かもしれない」と庵教授は言う。

また、こうした「やさしい日本語」が広く使われることが、「本来の日本語」をおかしくするのではないかという批判も一部であるが、それはまったく当てはまらないというのが庵教授の考えだ。

「それを言えば、多くの日本人が話している英語だって、おかしい部分はたくさんあるでしょう。日本語学習において『やさしい日本語』を取り入れるのは、『日本語をネイティブのように話す』というゴールを変えるわけではなく、入り口を変えているだけ。そのゴールに向けた過程で、ある程度不自然な言い回しが生まれてくるのは当然のことですし、それによって『ゴール』がゆがめられてしまいうわけではないはずだ」

多文化共生時代の日本で 日本語教師が果たすべき役割

もちろん、「やさしい日本語」を使うにおいて、技術的なことはそれほど重要ではない」という言葉は、専門職である日本語教師には当てはまらない。日本語教師を名乗るのであれば、語彙の使い方

—〈やさしい日本語〉— の支援&参考ツール

NHK「NEWS WEB EASY」

<https://www3.nhk.or.jp/news/easy/>

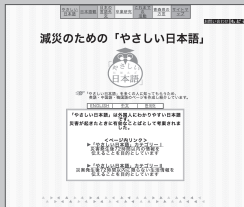
日本で暮らす外国人や、
小中学生向けに分かり
やすい言葉でニュース
を伝えるウェブサイト。



減災のための「やさしい日本語」

<http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>

災害時における外国人へ
の情報提供について研究
する弘前大学人文学部社
会言語学研究室のサイト。



やんしず(YAsashii Nihongo Slen System)

<http://www.spcome.ceci.tohoku.ac.jp/~aito/YANSIS/>

「やさしい日本語」を記述するた
めの補助ソフトウェア。外国人
に代わって「どこが分かりにく
いか」を指摘する。



横浜市「やさしい日本語での情報発信について」

<https://www.city.yokohama.lg.jp/lang/residents/ej/>

外国人向けの情報発信のポイントを
まとめた冊子『「やさしい日本語」で
伝える 分かりやすく 伝わりやす
い日本語を目指して(第4版)』など
を公開。



「にほんごこれだけ!」サポートサイト

<http://cocopb.com/koredake/index.html>

日本語初級の外国人でも無
理なく基本文型が身に付く
教材『にほんごこれだけ!』
(庵功雄 監修/ココ出版)
のサポートサイト。



や話すスピード、話し方まで、学
生のレベルに合わせて調整する技
量を十分に身に付けている必要が
ある。

「その意味で、これもまた『や
さしい日本語』とわざわざ言うま
でもない、当然のことといえるか
もしれません」

そして、そうした「日本語教育
のプロ」としての役割の他に、日
本語教師にはぜひ担ってほしい役
割がある、と庵教授は言う。

「先にお話ししたように、『やさ
しい日本語』が地域社会の共通語

として機能していくためには、マ
イノリティーである外国人への日
本語教育と同時に、マジヨリテイ
ーである日本人の側の意識を変え
ていく必要があります。そうした
『日本人への教育』の部分を、日
本語教師こそが先頭に立って担っ
ていくべきだと思っております」

今回の入管法改正前から、日本
ではすでに多くの外国人が働き、
暮らしてきた。しかし、外国人技
能実習生への賃金未払いなどの人
権侵害のニュースは、国内外で広
く伝えられている。また、日常の

中において、外国人への差別がま
ったくないとはとても言えない状
況だ。

「日本語教師という、ある意味
で一番外国人に近い立場にいる人
間が、外国人の人権という問題に
無関心でいいはずはないと私は思
います。日本語教育を通してこの
社会をどう変えていきたいのか、
日本語教師一人一人が自分の言葉
で語れるようであるべきではない
でしょうか」

そうして「日本人への教育」に
も日本語教師が積極的に参加して

いくことで、日本語教育そのもの
の重要性も可視化されてくるかも
しれない、と庵教授は言う。

『日本語を教える』ことが先に
あるのではなくて、まずは外国人
が日本社会で生きていくために、
そして彼ら、彼女らを隣人として
迎え入れるために、何が必要な
かを考えること。その一つとして
日本語教育があるんだ、という認
識が重要だと思えます」